

A night sky with a crescent moon and several stars. The moon is in the upper right corner, and the stars are scattered across the dark background.

短編集

～小夜話～

風梨凜

たとえば晴れた夜、ふと見上げた星の彼方からこちらを眺めている誰かの存在を知ってしまったら、それはとてつもなく“不可思議”で“神秘”な事なのかもしれない。

けれども、230万光年も離れた小さな星の中で、地球の片隅から零れ落ちた伝説の調べに耳を傾け、つい口ずさんでしまった異星人の少年がいたのだとしたら……

Ich weiss nicht was soll es bedeuten,
Das ich so traurig bin.
Ein Maerchen aus alten Zeiten,
Das kommt mir nicht aus dem Sinn.
Die Luft ist kuehl und es dunkelt
Und ruhig fliesst der Rhein,
Der Gipfel des Berges funkelt,
Im Abendsonnenschein.

なじかは知らねど 心わびて
昔の伝説は そぞろ見にしむ
寥しく暮れ行く ラインの流
入日に山々 赤く映ゆる

P. F. Silcher 近藤 朔風/訳

M31-アンドロメダ星雲の光の穂先に浮かぶ宇宙基地-コスモベース“COSUMO BASE”教育知育区域。

その吸音制御室のデータに目をやり、女性教師ミムラはかすかに眉をしかめた。

「ローレイ？ これって、一週間前に……太陽系の辺境の星-地球-から収集したかび臭い伝説の歌じゃないの。一体、誰がこんな歌を歌っているの。それに、卒業試験も近い時期にコスモベースに残っている生徒がいるなんて、どういう事？」

黄金の瞳に緑の髪、鋭く上に切れ上がった猫のような耳。明らかに地球人とは違う容姿の女教師の問いに、同僚の教師は彼女と同じ瞳の色を少し濁らせてこう答えた。

「ナイトシェイドの弟の方でしょう？ あの子の持つ能力が適正試験でひっかかって、卒業試験の宇宙船-インターシップ-に乗ることを禁じられてしまったんですよ」

ジルとアウル、双子のナイトシェイド姉弟は、コスモベースでも1, 2を争う優秀な生徒として名を馳せていた。順当にゆけば、この卒業試験で彼らは正式なインターシップの乗組員になり太陽系惑星の探査の職を手にするはずだったのだが……。

「歌ってはいけない」と、口をすっぱくして言っておいたのですが、最近のアウル・ナイトシェイ

ドは、とても情緒が不安定で、少しも教師たちの言いつけを守ってはくれないのです。特にあの“地球の歌”を覚えてからは、その傾向が激しくなって、吸音制御室から出せない状態になってしまったのです」

同僚の言葉にミムラは、もう1度、吸音制御室のデータに目をやり、小さく息を吐いた。

「アウルは歌うのが好き。けれども、アウルの歌を聞いた者は、視界を失い訳も分からずにあの声に魅了されてしまう。それは、このコスモベースを大混乱に陥れてしまうでしょう。ローレイの伝説の話に自分を重ね合わせて、それがラウルを刺激してしまったのだとしたら、あの子にその話をしてしまった私は、大きなミスを犯してしまったのかもしれない」

* * *

「アンドロメダ銀河の星雲圏から外に出るわよ。これより、私たちの船、Semi-インターシップは、ワームホールを超光速で通過し太陽系へワープします」

Semi-インターシップ。それは、コスモベースでも選りすぐりの優秀な子供たちが、“教育知育区域”と呼ばれる訓練機関での履修を終えるための-卒業試験-用に開発された宇宙船だ。

小型ではあるが、教官を伴わない訓練生のための飛行に適合させ、安全性を重視しており、緊急用のオートパイロット（自動操縦装置）や非常脱出装備等は、通常のインターシップよりぬかりがない。

視界の中から押し出されてゆく、アンドロメダ星雲の長い楕円の光芒を惜しむように、ジル・ナイトシェイドは金の瞳を少し細め、Semi-インターシップの操縦席のフロントガラスを見つめ続けた。

白く透き通った肌、襟裳でさらさらとたなびく艶やかな緑の髪、そして宇宙年0.66（地球では16歳）とは、思えないほどの大人びた端正な顔だちと明晰な頭脳は、優秀さにおいて今年の訓練生の中でも特に群を抜いていた。ただ一人、彼女の双子の弟、アウル・ナイトシェイドを除いては。

アウルと一緒に、卒業試験のインターシップに乗りたかったのに……

Semi-インターシップへの搭乗を禁止されてしまった弟の事を思い、ジルの心は沈んでいた。だが、

“ワープ終了、ワープ終了”

その報告音と共に突然、目前に広がった6000億もの光の粒。

「見て！ 天の川よ！」

天の赤道のはるか北、カシオペヤ座から南十字星にまで流れ込んだ星の銀漢。ワープ航法の終着点に指定した太陽系銀河の星の洪水を目にして、ジルは歓声をあげた。

「地球まであと少しだよ！ 映像でしか見れなかったあの星を真近にできるなんて、本当にすごい」

背中ごしに聞こえてきた他の訓練生の陽気な声に、ジルは明るい笑顔を見せた。

コスモベースの隔離された部屋の扉の前で、女教師ミムラは彼女専用の通信器に送信されてきたデータに目をやり、軽く眉をしかめた。

音声反応がある……アウルがまた、歌っているんだわ。

美しい少女のへ 巖頭に立ちて
黄金の櫛とり 髪のみだれを
梳きつつ口吟む 歌の声の
神経き魔力に 魂もまよう

岩場にたたずむ金色の櫛を持った美しい少女の歌に船頭が魅せられると、船が川の渦の中に飲み込まれてしまう。

ローレイ、そんな歌詞で綴られている地球の伝説の歌を

「アウル、ミムラよ。部屋に入りたいの。だから、その歌をやめて」

戸口に付けられたインターフォンに向けて、女教師は諫めるようにそう告げた。厳しいが親愛のこもったその声音を待っていたかのように歌声はぴたりと止まり、そして彼女がそうする前に吸音制御室の扉が開いた。

アウル・ナイトシェイドは、座っていた椅子の足を軽く蹴るように立ち上がり、扉の向こうから彼に近づいてくる女教師に向かって笑顔を作った。双子の姉のジルよりも少し青白い肌と寂しげな黄金の瞳。華やかな姉と対照的に弟のアウルの印象は、静かな湖面の底を思いおこさせるように静かだった。

太陽と月。コスモベースの誰もが、ジルとアウルをそんな風にとらえていた。

「良かった。退屈でたまらなかったんだ」

心底ほっとした様子のアウルを見て、ミムラもつられるように笑顔を浮かべる。

「こちらも良かったわ。Semi-インターシップに乗れなくて、もっと、しょぼくしてるかと思っていたから」

搭乗を拒まれてしまった宇宙船の名を聞いて、アウルは少しすねたように口をとがらし、事実上、軟禁されてしまった吸音制御室の大型モニターの方へ目をやった。

天の川のたもとに浮かぶ青い惑星“地球”に向け、星座の光の帯の中を進んでゆく宇宙船。その側面には“semi-intership”の文字がある。

「さっきからずっと、通信衛星から送られてきた映像を見ていたんだ。訓練生で1番の成績の僕が、何故、あの船に乗れないのさ？ 本当なら、僕もあの船に乗って地球に向かうはずだった。こんなに理不尽な扱いを受けるなんて、ぜんぜん納得がいかないよ」

「アウル、あなたには分からないの？」

ミムラの問いに金の瞳の少年は、無愛想にこう答えた。

「僕が歌うから？ ローレライを」

「そうよ、あなたの歌は人の心を惑わす。もし、semi-インターシップの操縦席でそんな事が起こりでもしたら、訓練生たちの安全を私達は守れなくなるわ。それが、分かっているのに、どうしてあなたは、あの歌を歌い続けるの？」

「なんだか、心が落ち着かないんだ。歌っていないとすごく不安で……」

アウルは、そう言ったきり口をつぐみ、ぷいとそっぽを向いてしまった。

「歌うのをやめない限り、アウル……私はここからあなたを出してあげるわけにはゆかないわ」

彼女に背を向け、大型モニターに移された宇宙船の映像に見入る、アウル・ナイトシェイドの後姿に目をやり、ミムラは、はっと大きく金の瞳を見開いた。

彼女がアウルに教えた伝説の歌、ローレライ。

ゆったりとした4拍子のメロディーが耳に響いてくる。ただし、言葉のない形で。

口笛……。アウル、何故、そこまであなたは、その曲にこだわるの？

ローレライの調べを口笛で奏でながら、アウル・ナイトシェイドは遠く離れた太陽系の銀河の海に思いを馳せていた。次第に強くなってゆく不安の思いを胸に抱きながら。

* * *

ジル・ナイトシェイドと他の3人の訓練生たちを乗せた宇宙船“semi-intership”は、地球から3000光年ほどの距離にある射手座の散光星雲の近くを航行していた。

「おっ、彗星発見！ みんな、窓の外に注目して！ 太陽と反対側の方向に、青い彗星の尾が見えるよ」

インターシップの操縦席で、訓練生の一人が甲高い声をあげて、フロントガラスを指差した。ジルより二つ年上の彼は、熱心なコメットハンター（彗星搜索家）で、彗星が恋人の“彗星オタク”だ。

天の川に長く尾をひいて地球へ落ちてゆく彗星は、青い光の筋を星の間に残したとたん、ふっと姿を消してしまった。それでも、まだイオンテイルの残像が頭の中では、きらきらと輝いていて、訓練生たちは、しばらくは降るような星の列から目を離せないでいた。

「僕はあの彗星の尾に、地球に向けての、僕たちのメッセージを乗せたいと思っているんだ」

彗星オタクの彼は熱を込めて、そう言った。

「……」

ジルは、その言葉にちょっと眉をしかめてしまった。

「彗星の尾に？ そんな事ができるなんて聞いた事もないわ」

「彗星の尾から電磁波が観測された事を知っているかい。それを利用して、テレビの映像や音声のように僕らの言葉を地球の人たちに伝える事ができないだろうか」

……理論的には可能でも、実現させるのはとても難しいわーと、ジルは思ったが、

「故郷の星を亡くしてしまった私たちから、あの青い地球に警告のメッセージを送る事ができたなら、それはとても素晴らしい事ね」
と、笑ってみせた。

彼らが住むコスモベースは母体となる“星”を持たない単独の宇宙基地だ。なぜなら、彼らの母星はとうの昔に消滅してしまったのだから。

限界までの発達で、境界線を越えてしまった時、彼らの星は突然、崩壊した。そして、宇宙開発のために特に優秀として選ばれ、コスモベースに滞在していた百人に満たない研究者たちとその家族だけが、アンドロメダ星雲の星の間に取り残された。

“ワープ航法に入ります。ワープ航法に入ります”

再び、semi-intershipの警報音が鳴った。

フロントガラスに目をやり、計器で現在位置を確かめてから、ジルは興奮気味に言った。
「10分後にまた、ワープ体制に入ります。みんな、席について安全体勢をしっかりと取って。今度は一気に地球の近くまで飛ぶわよ！」

モニターの映像の中で、

雲の間から太陽の光を受けた地球の海が、コバルトブルーに輝いている。
暗い宇宙の空間に浮き上がった限りなく透明なその色を見てみると、なんとなく厳かな気分になってくる。ジルは、操縦席の安全バーをおろし、ほうっと小さく息を吐いた。

銀河の果てから見つめているだけなら、とても美しい地球。

けれども、

温暖化、オゾン層の崩壊、異常気象、水不足、気象の変動、洪水、旱魃、食料不足。

それに伴う大量の難民の増加と地域紛争。

それを放置しておいたなら、あの星は、ほとんど私たちの星と同じ道をたどる事になる。

もし地球から8.6光年離れたシリウスA、あるいは25.3光年離れたベガが超新星爆発を起こしたら、地球に住む生命はほぼ確実に絶滅するか壊滅的な打撃を受ける。そんな危険な仮説だって、有り得ないとは言い切れない。

「地球の人とコンタクトを取れたなら、私は真っ先にそれを伝えたいわ」

独り言のように呟いたジルの言葉が終わらぬうちに、

“ワープ開始、ワープ開始”

宇宙船の中に、再び、警報音が鳴り響いた。そして、光速の波に乗ったsemi-インターシップは、星間の海を一気に突き抜けていった。

* * *

「そんなに地球が気に入ったんなら、いっその事、みんなで地球に移住してしまえばいいじゃないか」

コスモベースの吸音制御室で、アウル・ナイトシェイドは、こそばゆいような笑みを浮かべて、女教師ミムラに言った。

「とんでもないわ！ 同族の難民さえ受け入れを拒みたがる彼らなのに、金の瞳、緑の髪……明らかに地球人と違う私たちが降りていったりしたら、どんな騒動が起きると思うの。あの星の人たちの心はまだまだ、未発達で未知な物を迎え入れるほどの余裕はないのよ」

「なら、征服してしまえば？ 僕らの科学力をもってすれば、簡単な事じゃない。見守って助言を与えるなんて、面倒くさいプロジェクトなんか破棄して」

ミムラは半ば、非難するような口調で自分の教え子を睨めつけた。

「アウル、そんな事を言うものじゃないわ！ そんな戦いを起こしてしまえば、また星が一つ消えてしまうわよ」

ミムラの剣幕に、アウルはぷうっと噴出しながら“冗談だよ”といたずらっぽい笑顔を見せた。だが、女教師はまだ、憤りが治まらぬ様子でアウルをたしなめた。

「本当に危険な考えを持つのはやめて！ 他の教師は騙せても私はそうはいかないわよ。あなたが持っている特殊能力は“ヒュプノシス”……ローレイの歌のように歌う事で人の心を操る“催眠能力”だけではないわね。

接触感応、透視能力、精神感応、予知能力、念動力。

そのすべてを兼ね備えたあなたが、その気になれば、一人でも地球に相当な被害を与える事ができるでしょう。でも、アウルは、今までは上手く能力を制御して、それを乱用することはなかった。だから、私も気づかぬふりをしてきたのに、何故なの？ どうして、そこまで心を揺らしているの」

姉のジルとミムラだけが、アウルの本当の力に気づいていた。そして、アウルもそれを知っていた。

「だって、星の上を歩きたいんだ。こんな宇宙の空間に浮かんでいるだけの自分が、僕は哀しくてたまらない。インターシップに乗って、あの青い地球に降り立ってみたい。ミムラ、あなただって、そんな夢を見たことがあるんでしょう？」

どんな言葉でなだめれば、この子の気持ちを治める事ができるんだろう？

永遠に見つかりそうもないその言葉に、ミムラはただ、沈黙するしか手立てがなかった。

長い沈黙を2人が息しく感じ始めた時、突然、ミムラの通信機が激しく鳴り響いた。即座に吸音制御室の設備が機能し、その音は壁の中へ吸い取られてしまったが、滅多に鳴ることのない第1級の警報音に、女教師は驚いた様子で通信機に耳を傾けた。

“semi-インターシップがワープ地点から軌道はずしました。15分後に射手座A*の電波源に侵入します。誘導限界は到達前-5分。ミムラ教官、非常事態です！ すぐに管制室へ戻って下さい！”

「何ですって！」

顔面を蒼白にして座っていた椅子から立ち上がったミムラに、アウルが声を荒げた。

「ジルたちのインターシップが射手座のA*に?! 本当に?!」

「アウルはここにいて！ 部屋を出るんじゃないわよ、絶対に！」

有無を言わせぬ声音でそう言ってから、女教師は彼女の生徒を吸音制御室に残し、扉のロックを固く閉めた。それから、脱兎のごとく管制室に向けて駆け出した。

「ミムラ、ここを開けて！ 僕も一緒に連れて行って！」

懸命に扉をたたいてみても、応答はない。真っ赤に充血したこぶしを下におろし、アウルは唇を震わせながら、semi-インターシップを映しだした大型モニターに目をやった。

* * *

銀河の中を行く1機の宇宙船

-ジルと他の訓練生たちを乗せたsemi-インターシップ-

それが、異様に強力なエネルギー波を放射する重い星へ引きずられてゆく。

射手座のA*は、大質量のブラックホール。一度、その中へ落ち込むと光でさえも、その重力からは逃れられない宇宙の墓場。

「お願いだから、僕をここから出して！ 暗黒星雲の果てへ、ジルとみんなを行かす気なのか！」

滲みだした鮮血をかまうこともしないで、アウルは吸音制御室の扉をたたき続けた。

コスモベースの内部には、第1級の危険を知らせる、けたたましいほどの警報音が鳴り響いていた。だが、極限まで外部と遮断された彼の部屋には、物音一つ響いてはこない。

悔し涙が知らず知らずのうちに溢れてくる。それをこらえようとして、アウルははっと吸音モニターから逆流してきた音声に耳をすませた。

Ich weiss nicht was soll es bedeuten,

Das ich so traurig bin

-なじかは知らねど、心わびて

昔の調べはそぞろ身にしむ-

「ローレイ……」

その音をそう認識した時、アウルは絶叫した。

「この扉を開けろ！ 僕をここへ閉じ込めるな！！」

緑の髪と金の瞳の少年の声が、部屋に轟いた瞬間、
耳をつんざく大音響がコスモベースに響き渡った。

アウルの中からほとばしった未知の“力”。

その作用で、一気に膨れ上がった吸音制御室の空気の密度が、狭い空間に耐え切れず部屋の扉を押し破ったのだ。

そして、アウル・ナイトシェイドは、吸音制御室から出て行った。粉々に砕け散った扉の上を夢遊病者のように覚束ない足取りで通り過ぎながら。

コスモベースの管制室。

「semi-インターシップの自動操縦システムへの精測レーダー進入を行います。誘導限界は3分。もし最終進入において5秒間インターシップからの送信がなかった場合はこちらからのアシストは無効となります」

徐々に射手座A*の電磁波-ブラックホール-の中へ引きずり込まれてゆく、semi-インターシップの映像を食い入るように見つめながら、女教師ミムラは、口惜しげに唇を噛みしめた。

「事前の整備には、何のトラブルもなかった……それなのに、何故こんな事に……」

コスモベースからsemi-インターシップへ直接、誘導電波を送って軌道を修正させようとしても、絶大なブラックホールの吸引力に、勝てる見込みは10%にも満たない。

手塩にかけて育ててきた訓練生たちを、むざむざ宇宙の墓場に追いやってしまうなんて……

「駄目です。訓練生からの送信はありません。semi-インターシップは、ブラックホールの重力圏にすでに突入した模様で……」

管制官の一人の声が空しくコスモベースに響いた。

「そんな、他に何か手立てはないのっ！ あの子たちを見殺しにはできない！」

泣き声のような叫びをあげたミムラは、その時、管制室にふらりと入って来た少年の姿に目を見張った。

「アウル……アウル・ナイトシェイド……」

漕ぎゆく舟人 歌に憧れ

岩根も見やらず 揚げばやがて

浪間に沈むる ひとも舟も

神怪き魔歌 謡うローレライ

アウル、歌わないで。

その歌を歌っては駄目。

ぼんやりと薄れてゆく思考の中で、ミムラの頭の中に透き通るようなアウルの歌声だけが木霊していた。

ローレイ

それは、伝説。そして、地球から宇宙に伝え語られた魔性の調べ。

* * *

「どうしろっていうの！ 計器もレーダーもすべてブラックホールのエネルギー波に狂わされてる！」

凄まじい重力がのしかかるsemi-インターシップの中で、ジル・ナイトシェイドはなす術のないもどかしさに声を荒げた。

年周視差の計算を間違えてしまったの？ にしても、ワープ地点を射手座A*に設定してしまうなんて、有り得ない！

暗黒の星雲が迫ってくる。インターシップの窓とフロントガラスには、ジルたちと同じように宇宙の塵や小さな星がきりきりと舞いながら、ブラックホールの重力に引きずられてゆく。

「ジル、インターシップを捨てて、個人用の高速ロケットで脱出しよう！ まだ、今なら間に合うかもしれない！」

訓練生の一人が言った。semi-インターシップには一人に一機の小型ロケットが搭載されている。それを使って超高速で重力圏を脱出する。もう、それしか手立てはなかった。

「みんなも急いで、事態は一刻を争う！」

ジルは、即座に立ち上がり脱出ハッチの方向へ走り出した。

「みんな、どうか無事で！ きっと、また会える」

短い言葉を交わすと、訓練生たちはそれぞれのロケットに乗り込み、semi-インターシップから飛び去っていった。

だが、すでに船外は、ブラックホールの負のエネルギーで覆い尽くされてしまっている。

“操縦不能”のサインを目にして、ジル・ナイトシェイドは、悔しげに、乗り込んだ脱出用ロケットの計器に拳をたたきつけた。

「こんな宇宙の果てで消えてしまうの！？ 嫌よ、それだけは絶対に嫌！」

ジルを乗せたロケット横を力尽きた幾つもの星々が、哀しい声をあげながらブラックホールに落ち込んでゆく。

星たちの声が聞こえる……。

そういえば、彗星の尾にメッセージをこめれるんだと、訓練生の彼は言った。

どうしようもない絶望の中で、ふと、そんな事を思った時、ジルははっと遠くから響いてくる声に耳をすませた。

“ジル？ ジル……どこにいる？”

聞き慣れた双子の弟、あれは、彼女の半身の声。

「アウル、アウルなの？ 助けて！ 私はここよ、ここにいる！！」

そう叫んだ直後、ジルを乗せた脱出用ロケットは、木の葉のように舞いながら、宇宙に巻き起こる暗黒物質の渦の中へ消えていった。

* * *

コスモベースの誰もかもが、身動きができなくなっていた。アウル・ナイトシェイドの奏でる歌が、ゆらゆらと頭の中に流れ込んでくる。乗組員たちは魅せられたように、その音色に心を奪われ、semi-インターシップの救助の事などすっかり忘れて、夢うつつに、その場に立ち尽くしている。

かろうじて意識を持ちこたえていた女教師のミムラは、コスモベースの大スクリーンを背にしたアウルの姿を見つめて、大きく目を見開いた。

消えてゆく……？

アウルの姿がゆっくりと薄れてゆく。彼はミムラの戸惑った視線を感じてか、かすかな笑みを浮かべて言った。

「ローレイ……僕は思うよ。金の瞳と緑の髪を持つ僕たちだって、この歌が伝えた伝説の場所に、いつかは降り立つ事ができるんだ」

そして、アウルの姿が完全に消えてしまった時、
けたたましい警報音とともに、コスモベースが激しく揺れた。
大地震のような激震の中で、

“第1級危険信号！ コスモベース前方に超重力空間が出現。緊急避難体制をとれ”

金属めいた声音の警報のアナウンスが、ぼんやりと薄れていたコスモベースの乗組員たちの意識を、一挙に目覚めさせた。

その時彼らは、ぎょっと操縦室の大スクリーンに目を向けた。

周りを強力なエネルギーとX線に囲まれた黒い空間が、目の前に立ちはだかっている。

「ブラックホール！！ なんで?! どうして、こんな場所に現れたの!」

あせった様子で、そばにいた管制官がミムラに言った。

「い、位置が、コスモベースの位置が移動しています！ ここは射手座のA*、大質量ブラックホールの真正面です!」

まさか、ラウルが!? ……あの子の力が、コスモベースを射手座のA*に移動させたっていうの!? わからない。それでも、

「吸い込まれる! semi-インターシップと同じように、私たちのコスモベースもあの重力の渦の中へ!」

ミムラの絶叫とともに、コスモベース全体は、ブラックホールの重力の中へ落ち込んでいった。

* * *

どのくらいの時間がたったのかはわからない。ぼんやりとミムラは立ち上がり辺りの景色を見渡した。

コスモベースは、正常な姿のまま、そこにあった。

計器類も椅子やテーブルの備品も、破損している様子はない。

けれども、ミムラも他の乗組員たちも一様に不思議な面持ちで、お互いの顔を見やった。そこには、金の瞳と緑の髪をもつ者は、一人もいない。

青い瞳に小麦色の髪、あるいは黒い瞳に黒の髪.....

瞳と髪の色が変わってしまっている.....

どういう事?! これじゃあ、まるで地球人と同じだわ。

開いたハッチの向こうから、鳥がさえずる声が聞こえる。ふらりと覚束ない足取りで、外に出たミムラは信じられないと、声を荒げた。

コスモベースの外の世界は目に染み入るような緑の森。そして、響いてくるのは、さらさらと流れる水の音。

にわかに脳裏に浮かぶのは、映像でしか見たことのない惑星.....地球

「ここは、地球? まさか.....そんな事って?! 確かに私たちのコスモベースは、ブラックホールの中に吸い取られたというのに.....」

ブラックホールを通り抜けて地球にワープしてしまった.....とでも言うの?

その時に何らかの力がかかって、瞳と髪の色まで変えてしまった?

まさか、アウルが.....でも、そこまでの力を彼が持っていたなんて.....私には信じられない。

「ミムラ教官! 訓練生たちが!」

乗組員の一人が森の向こうを指差し、驚いたような声をあげた。

岩場のある川べりの方向から、semi-インターシップに乗り込んだはずの卒業生たちが、コスモベースに向けてふらふらと歩いてくる。彼らもやはりブラックホールを通り抜けて地球に降り立ってしまったのだろうか。

「あなたたち、よく無事で.....」

だが、彼らの顔をしてはいても、その瞳と髪の色はやはり地球人のような色に様変わりしていた。

訓練生らの元へ駆け寄ったミムラは、喜びと戸惑いと不安の気持ちが混ざり合い、泣きたいような気持ちになった。だが、歩いてきたのは3人、訓練生は4人のはず.....

「ジルは？ ……ジル・ナイトシェイドはどこ？！」

* * *

“ジル、起きて。もうすぐ、地上が見えてくるから”

ジル・ナイトシェイドは、聞き覚えのある澄んだ声に目覚めさせられ、乗り込んだ高速ロケットの中で瞼を開いた。

夢を見ているのだろうか？ 回りに過ぎてゆくのは星屑の欠片でもなく、彗星の尾でもない。青い空にかかる白い雲。

ロケットの操縦席から、眼下に広がる一面の緑の森が見える。長く蛇行した川が森の木々の合間を縫って、遠くの家へ流れてゆく。

「こ、これは、この景色は……」

地球？！

そして、金の瞳と緑の髪の子を乗せた宇宙船は、地上に向けて下降しながら、ゆっくりと速度を落としていった。

美しい少女のへ 巖頭に立ちて
黄金の櫛とり 髪のみだれを
梳きつつ口吟む 歌の声の
神経き魔力に 魂もまよう

ブラックホールに飲み込まれた瞬間に響いてきたその歌声が、再びジルの耳元に流れてきた。「アウル、アウルなのね？ ブラックホールに落ちた私をここへ連れてきてくれたのは。でも、どこ、あなたはどこにいるの！」

だが、ジルの問いかけにその声は、こうとしか答えなかった。

“君はこの地球では一人きりの異星人。それでも、地上では仲間たちが待っていてくれる。彼らはもう、君とは違っているのだけれど、ジルはみんなとここで暮らせよ。

僕は思うよ。金の瞳と緑の髪の子……そんな僕たちだって、この地球で暮らせる日がきっと来るって”

徐々に小さくなってゆくアウルの声に、ジルは乞うように言った。

「アウル？！ 駄目よ、私と一緒に来て！ お願いだから」

だが、アウルの返事はもう返ってはこなかった。

地上では、どうにか落ち着きをとりもどした乗組員たちが、コスモベースが降り立ったと思われる場所の確認を始めていた。

管制官の一人がミムラに言った。

「やはり、ここは、地球です。地球の地理でいえば、この位置は欧州の一角。ライン川流域にある町、ザンクト・ゴアルスハウゼン、その東の森の中です」

「ライン川流域！？ それって、“ローレイ”！？ まさか、ここは、アウルが歌ったあの伝説の場所?!」

アウルの歌にたぐり寄せられ、ブラックホールに引きずり込まれた私たちの境遇は……まるでローレイの伝説をそのまま、なぞったかのようだ。ただ、違うのはコスモベースの行き着いた先は、死の淵ではなく緑の地球。

ミムラは、解せない気分のままに、ふと空に目を向けた。その時、空の彼方がきらりと眩しく輝いた。抜けるような青い空から降りてくる銀の光。

「あれは……？」

眩しげに目を細めたミムラに、傍らにいた管制官が啞然として言う。

「宇宙船……だ。目視でも姿が確認できます。あれは、semi-インターシップの緊急脱出用ロケット。そして、最後の緊急用ロケットに乗った訓練生は……」

「ジル・ナイトシェイド！」

興奮気味に瞳を輝かせたミムラに、管制官が再び驚いたような声をあげた。

「ミムラ教官！ 計器が何かの信号を受信しています。これは……」

「これは……何？」

「音声信号だ……」

なじかは知らねど 心わびて
昔の伝説は そぞろ見にしむ

「ローレイ！ これは、アウルの声だわ。アウル、彼がいるの？ 一体、どこに?!」

だが、ミムラの問いに管制官はわからないという風に首を横に振った。

「物質反応は何もありません。彼の存在を確認することはできません」

その言葉にミムラは深く息を吐き、空から地上に降りてくる銀のロケットを見つめて、少し寂しげに微笑んだ。

「アウル……ローレイの歌の調べに誰よりも心を奪われていたのはあの子だったのかもしれない。あの子が一番、地球に焦れていた。だから、彼はローレイを歌いたがったのよ。私たちをこの場所に来させるために、彼がここに来るために」

“僕はずっと見つめているんだ。今までも、そしてこれからも”

ローレイを口ずさみながら。

金の瞳と緑の髪を持つそんな僕たちが、いつか地球で暮らせる日がきっと来る。

僕は.....

その日まで。

～完～

“猫は命を9つ持っている”

そんな言い伝えを知っていますか？ 確かに猫たちは、命を9つ持っています。でも、もしあなたが猫ならば、残念な事に9つのうち8つまでは使いきってしまった。けれども……

* * *

ある小学校の校庭の片隅に、ニワトリ小屋がありました。とても平凡なその小屋には、ありきたりのめん鳥が飼われていました。白い体に赤いときか、他のニワトリと違うところといえば、少し小さくて尾が長いといったところでしょうか。

それは、秋の夜の事、ニワトリは、網目のすきまから小屋の中に入り込んできたネズミにちょっと怒ったような声をあげました。

「ねえ、それ、私のなんだけど」

ネズミは、ニワトリ小屋の餌箱にあったトウモロコシの粒を上手そうにほおぼりながら笑いました。

「ふふん、知るもんか。そんな事、いったい、誰が決めたんだい？」

「それは、一生けんめい、ニワトリ小屋の世話をしてくれてる生徒たちが、私のために作ってくれたご物なのよ」

ネズミの顔色がさわっと青く変わったのは、その時でした。

「その一生けんめいな生徒たちが、この小屋を襲いに来てるぞ……」

いかにも柄の悪そうな中学生たちが、どかどかと小屋の中に入ってくるではありませんか。

“違う、この子たちはここの生徒じゃない”

ネズミはいち早く柵をすり抜けて小屋の外に逃げていってしまいました。ところが、逃げ場のないニワトリは、中学生の中でも一番乱暴そうな男子に捕えられてしまったのです。「ちょうどいいや、この鳥、焼き鳥にして食っちまえ！」

“ええっ”

ニワトリはとんでもないわと、声をあげました。

「だめ、焼き鳥なんて……それだけは、絶対にだめ！」

その時、一匹のトラ猫が風のように現れました。

銀の爪に、鋭い牙、極めつけは最終兵器の猫キック。

「うわわっ、何だこの猫！ どこから入ってきた?!」

たちまちのうちに、中学生たちは蜘蛛の子をちらすように校庭の外に逃げていってしまいました。

「へへん、どんなもんだい。俺様は強いだろう？」

トラ猫は、欠けた耳をぴんと動かすと、自慢げな茶色の目をニワトリに向けました。

「すごい。ネコ君は本当に勇敢。あんな怖そうな中学生をもろともせずに追い払うなんて」

その言葉がさらにトラ猫の気分を良くさせました。

「当たり前だろ。猫は9つの命を持っている。だから死すら恐れはしない。っていっても、ほとんどの猫は8つまでは命を使い切っちゃってるんだ……でも、俺様はまだ、7つしか使っていない。だから……俺は」

“もう1回、生まれ変わる事ができるんだよ”

「すごい。命を9つも持ってるなんて」

また、ニワトリ小屋にもどってきて、偶然に2匹の会話を聞いてしまったネズミは、しげしげとトラ猫を見つめると、興味津々の顔をして言いました。

「でも、9つのうち、7つは使っちゃまったって、前の君は、一体、どんな風に死んだの？」

すると、トラ猫は、困ったようにぴんとひげをたてました。

「前の事はよくは覚えてないけれど、まあ、死んだんだからな、いい気分ではなかつただろうさ。でも、俺様の遠い親戚の言うところでは6番目の俺は、獰猛な野犬たちから子猫を守って、英雄みたいに死んだそうだよ」

7番目の俺は……全然覚えていないな。

まあ、そんな事は今さら気にしてねえよと、トラ猫は笑うと、

「いけねえ、こんな場所で油売ってる場合じゃなかった。まだ、俺様には大切な用事があったんだ」

と、大急ぎで校舎の方へ駆けていったのです。

はねるように駆けてゆくトラ猫の後姿を見つめながら、ネズミはちょっと訝しげにニワトリの方に目をやりました。

「なんか半分信じて、半分嘘っぽい話だな。でも、命が9つっていうのはいいな。僕にも余分に命があったらなあ」

「そうかなあ……8回も生まれ変わったら、私なら退屈でたまらない。だって、自分だけが生まれ変わったって、親や兄弟や友達たちが、みんな死んでしまっていたら、楽しくも何ともないわ。永遠の命なんて、つまらないだけよ」

ニワトリの答えにネズミは、ちょっと驚いたように言いました。

「別に永遠の命とまでは言ってないけど、せめて、予備用にあと1つ命が欲しかったなあ」

やがて、校庭に吹く風が少し冷たくなってきました。

「僕もそろそろ、行こうかな。でも……その前に、あのトラ猫の行く先をチェックしてくる。えらく急いで校舎に入って行ったよな。きっと、どこぞの美人の猫とデートでもしてるんだぞ」

と、ネズミはおどけたような笑みを浮かべて、ニワトリ小屋から去ってゆきました。

どこまでも、好奇心満々のネズミにニワトリは、ちょっと苦笑いをしてしまいましたが、

なんとなく、ちぐはぐな感じ。

そんな風を感じながら、ふと見上げた夜空では、

空の月が朧にかすんで、小学校の校庭に薄暗い影を落としていました。

* * *

小学校の校舎へ潜入していったネズミは、2階にある教室を覗き込み、そこにトラ猫の姿を見つけて、にやりと笑いを浮かべました。

やっぱり、美人ネコとデートだ。

トラ猫の相手は、真っ白い雪のような毛並みの猫でした。

「ニワトリが助けを呼んでたんだ。……で、その時の俺様はものすごく勇敢だったとおもうぜ」

おや、おや、さっそく、さっき不良を追い払った時の自慢話かい。

ところが、ネズミはその時、あれ？ と首をかしげたのです。

トラ猫のお相手 -教室の窓辺を背にした純白の子猫- のつややかな毛並みは、夜光灯の灯かりに照らされて、美しく輝いていました。けれども、

あれって……どう見たって

人形だよな。

ネズミは、心に落ちない顔をして、2匹の猫をじっと見つめ続けました。

文化祭を真近にした、この小学校では、子供たちが、出し物のマリオネットを粘土や絵具で様々な工夫をこらして作りあげていました。トラ猫が夢中になって話しかけている“純白の子猫”は、その中でも一番出来のいい、マリオネットの猫だったのです。

「今度、一緒に校舎の屋上に星を見にゆこう。お天気のいい夜には北斗七星が、きれいに輝いているから」

おかしいなあ。あいつ、お人形さんと空想ごっこするタイプじゃないと思うんだけどなあ……

あまりにも熱心にマリオネットに話しかけているトラ猫の姿に、ぴんとひげを斜めに揺らした時、ネズミは背中にぞくりと悪寒を感じました。

マリオネットの猫が、一瞬、刺すような視線を、ネズミの方向に送り込んできたのです。青い……氷みたいに冷たい瞳。

うわっ、これはヤバイ！

背中の毛がぞくりと立ち上がるような気がして、ネズミはぴよんと、一跳びすると、教室の前から全力疾走で廊下を駆けぬけ、大慌てで階段を下りてゆきました。

マリオネットの猫がいる教室。その危うい空気を感じ取って逃げる事のできたネズミは、意外と強い心をもっていたのかもしれませんが。ところが、心が未熟な……あのニワトリ小屋を襲った中学生たちは、ネズミとは反対にその空気に引きつけられてしまったのです。

「お、この教室、すげえ。人形がいっぱい」

3人の少年と1人のおかっぱ頭の少女。校舎の中で遊び場所を探していた彼らは、教室の棚にずらりと並べられたマリオネットたちの出来栄えに目を輝かせました。

「へええ、小学生が作ったにしてはよく出来てるな」

金の冠をかぶった王様。

「こっちには兵隊がいるぞ」

剣を携えた騎士。

弓をつがえた近衛兵。

「ほらっ、戦いだっ！！」

少年たちは、マリオネットを手にとると、それぞれがふざけた仕草で戦いの真似をし始めました。

「よしなさいよっ、せっかく作った人形が壊れちゃうでしょっ！」

さすがに小学生たちに悪いような気がして、おかっぱの少女が、少年たちを止めようとマリオネットの方へ手を伸ばした時、

あれ……？

妙に生き生きしすぎてる子猫の人形。

「みんな、こっちに来て！　すごく綺麗な人形があるよ。この瞳、青く光ってまるでこっちを見ているみたい」

3人の少年と1人の少女は、覗き込むように、純白の毛並みをもった子猫の人形に目をやりました。

* * *

「大変だ、大変だ、大変だあっ！！」

慌てふためいて小屋に駆けて来たネズミの姿に、ニワトリは、ぱたぱたと羽を動かし言いました。

「い、いったいどうしたの？　ネズミ捕りのお化けにでも追いかけてるみたい」

「ネズミ捕りのお化けだって？！　あいつはそれよりもっと、やっかいかもしれないぞ」

「あいつって？」

合点がいけない様子の子猫にネズミは、まくしたてるように声を荒げました。

「あの人形から、僕はものすごい悪意の力を感じたぞ」

「あの人形って……、一体、何の事を言ってるの？」

ニワトリの問いに、ネズミは声を震わせながら言いました。

「トラ猫のデートの相手だよ。トラ猫は気付いてないんだ。あれは、この世のものじゃない。あのままじゃ、あいつ、とり殺されてしまうぞ。いくら9つの命を持っているって……」

残りはあと1つなんだろ。

* * *

輝く純白の子猫のマリオネット。少年の中の一人が、魅せられたように、白猫のマリオネットを手にとり、その青の瞳を覗き込んだ時、

ぽっと、青の瞳の中に赤い光が浮かび上がりました。

少年たちが教室に入って来た時、いち早く、掃除道具入れの後ろに逃げ込んでいたトラ猫はちゅと、口をとんがらせました。

何だよ。俺の彼女にちょっかい出すのは、やめてくれよ。

ところが、

「うわあっ！　火、火があ！！」

ぼうっと、少年の目の前で音をたてて燃え上がった、白猫の青い瞳の中の炎。慌てふためいて、少年が白猫のマリオネットを投げ出した時、その火が、教室のカーテンに燃え移って、驚くようなスピードで天井に這い上がっていったのです。

大慌てで、掃除道具入れの後ろから飛び出したトラ猫は、少年たちに

“お前ら、早く逃げろっ！ この火、何だかおかしいぞっ！！”

そう伝えるつもりで鳴き声をあげました。

そうだ、あの白猫は？

あせって、白猫の方に目をやってから、トラ猫は少し戸惑った表情をしました。何故って、その白猫が赤く燃え立つ炎の中で、青い瞳をきらめかせながら、自分に微笑みかけていたのですから。

* * *

ネズミとニワトリは、小学校の校舎の2階の窓から大きく燃え上がった赤い炎に、ぎょっと目を見開きました。

慌てふためきながら、校舎の中から飛び出してきた少年と少女。

ニワトリは、その時、大きく羽を広げると、夜明けを告げるように高らかに鳴き声をあげました。

私をここから出して！ このニワトリ小屋の扉を開けて！

すると、逃げてゆく中学生たちの中で、おかつぱ頭の少女だけが足を止めたのです。

「今、何か言った？ 扉を開けてって言わなかった？」

戸惑いながら、少女がニワトリ小屋の扉に手をかけた、その瞬間、ニワトリは白い羽を大きく広げ、空に飛び立ってゆきました。

「駄目だよ、ニワトリさん、校舎の方に行っては！！」

ネズミの静止をふりきって、炎を広げごうごうと燃え上がりだした小学校の校舎の中へ、ニワトリは飛んでいってしまいました。

「何で、ニワトリが空を飛ぶの？ おまけに、あれじゃ……本当に焼き鳥になっちゃうよ」

あっけにとられながら、ネズミはその様を見つめました。

怖いけど、これは逃げてる場合じゃないな。

ネズミは勇気をふりしぼり、ぼうっと立ち尽くしている少女を置いて、校舎の方で駆けてゆきました。

小学校の校舎の2階。

突然、燃え上がった火の手。トラ猫は呆然と宙に浮かび上がった白猫に目をやりました。

バチバチと嫌な音をたてて、白猫の体からほとばしってくる火の粉。

「何でだよ」

トラ猫の問いに白猫は冷たい瞳で答えました。

「学校は嫌い」

「お前、この世の者じゃないな？ 何で俺は今までそれに気づかなかったんだろ……」

白猫は小ばかにしたように、トラ猫を見下ろして言いました。

「私は可愛がられて幸せに暮らしていた子猫。でも、ある日、家の人から私に言った。“ごめんね、次の家では猫は飼えないの”捨てられた私は、仕方なく、学校の校舎に住みついた」

「そこで、生徒にいじめられでもしたのか」

小さく首を横に振る白猫をトラ猫はいぶかしげに見つめました。

「生徒は私に、優しくしたわ、餌も運んでくれたし。それでも、また私はこう言われた。“ごめん。ノラ猫に餌をあげちゃ、いけないんだって”その冬、私はお腹をすかせて、体育館の床下で一人で死んだ」

「だからって、学校を恨む事はないだろう！」

「学校は寒かった。一人、床下で震えて、優しくした生徒たちを思い出すのは尚更、つらかった。途中で知らぬふりをするなら、何故、優しくするの？ 学校は嫌い、生徒は嫌い！」

「そんなの駄目だよ！ 猫は9つの命をもっている。そんな風に恨みの心をもっていたら、次の命までが、その心を引き継ぐぞ！」

トラ猫はそう叫んでから、口元をきゅっと閉じて心の中で思いました。

でも、この恨みの心でいっぱい白猫の命が9番目……最後の命だったのなら、こいつの魂は永遠に天国になんか行けないんだ。

すると、白猫はケラケラと声を出して笑いました。

「思い出せないの？ 自分の事なのに」

「えっ?!」

「私はあなた。今の1つ前のあなた……ただし、私は8番目の命」

トラ猫はその時、ニワトリとネズミに言った自分の台詞を思い出しました。

“俺様は、命をあと1つ持っている。だから、もう一度生まれ変わる事ができるんだ”

「勘違いしてるでしょう？ 今のあなたは9番目の最後の命。だから、もう、命なんて一つたりとも残ってはいないのよ！」

ちっとも、わけがわからない。学校を恨みながら死んでいった白猫が俺の8番目の命だって？ ！ なら、この白猫の生まれかわりが“俺”だっていうのか？

驚いて言葉も出ないトラ猫に、白猫は刺すような冷たい視線を送りました。

「9番目の私であるお前は、私があんなに悲しい思いをしたというのに、何でそんなに楽しげに生きているの?! そんなの許せない。だから、もう2度と生まれ変われないように、お前もこの

校舎と一緒に燃えてしまえばいいんだわ」

白猫の体が大きく赤く輝いた瞬間、トラ猫のまわりにぼうっと火の輪が燃え上がりました。

俺が、世の中を恨んでる、この白猫の生まれ変わり？

トラ猫はもう何もしたくなくなっていました。そして、ただ悲しげに白猫が炎の中に消えてゆく様を見つめているだけでした。

* * *

「あちちっ、駄目じゃん！こんなに火の手があがったら、学校がぜんぶ燃えちまう」
.....と言うよりも、おいらも危ねえ。

ニワトリの後を勇んで追いかけたネズミは、“止めときゃ良かった”と、ちえっと舌をならしました。

「おーい、トラ猫、さっさと逃げないと、お前も焼け死ぬぞう！」

それでも、ネズミは炎をかいくぐりながら、2階の教室をめざして駆けていったのです。

2階の教室の中で、トラ猫は放心したかのように、徐々に自分に迫ってくる炎の輪の中に立ちすくんでいました。

あの白猫が8番目の俺？学校と生徒を恨んで、天国にも行けないあの猫が？

自分の事だと言われても、そんなの、トラ猫の記憶には全くありません。今の自分はノラ猫でも、餌はコンビニのゴミ箱をあされば出てくるし、時には虫や鳥やネズミ（ネズミくんには悪いけど）だって狩ることができます。寝床だって、冬は風呂屋のボイラーの近くは暖かいとか、そんな知恵ももっています。

自分はけっこう、毎日楽しく暮らしている。でも、あの白猫はその事にも腹を立てているんだ。

“私があんなに苦しんで悲しい思いをしたというのに、9番目の私であるお前は、何でそんなに楽しげに生きているの？！”

何でなんだよ？俺は9番目のお前なのに、何でお前は俺の幸せを妬んでるんだよ？

白猫の言葉を思い出すたびに、トラ猫の心には、悲しいような情けないような、やるせない思いがこみあげてくるのです。

そうこうしているうちに、トラ猫の回りの火の輪は、ますます近づいてきました。

「こらっ、トラ猫、さっさと逃げろ！お前、焼け死にたいのかあっ！！」

教室の出入り口から、大声で叫ぶネズミの声が聞こえてきた時、トラ猫は茶色のしっぽにちりっと嫌な痛みを感じました。

しかし、火はどうしようもないほど、真近にせまってきていたのです。

「ネズミ君か？ 駄目だ。火のまわりが早くって、逃げるなんて無理だ！！」

「何とかしろよっ！ 何とかっ！」

「.....そんな事言ったって！」

ネズミは、あちちっ、あちっとなをあげながら、自分にも迫ってくる火の粉から逃げるため、そこらここらを行ったり来たりしながらも、トラ猫にエールを送り続けました。だが、トラ猫はあきらめたように顔をあげると言いました。

「ネズミ君、お前は逃げろ。でないと、お前まで命を亡くすぞ」

「えっ、そんなの駄目だよ。おいら、一人で逃げるなんてできないよ！」

そんなネズミに、トラ猫は笑って言いました。

「馬鹿！ 俺様はあと1つ、予備の命を持ってるって言ったのを忘れたのか？！ 俺は死んでももう一度、生まれ変わる事ができるんだよ！」

“猫は命を9つ持っている”

その言葉を思い出した時、ネズミは、はっと息を呑むように目の前の炎を見つめました。

「わかった！ おいら、ニワトリ小屋の前で待ってるから！ 必ず、そこに来るんだぞ」

そして、一目散に外に向かって駆け出して行ったのです。

いよいよ、火が体を飲み込もうとしてきた時、トラ猫は熱さに顔をゆがめて思いました。

ネズミ君、ごめんな。俺の命はもう、残ってないんだってよ。今の俺は9番目の俺。これは、最後の命なんだ。

でも、安心しなよ。ここで死んでしまっても、俺はみんなを恨んだりしないから.....。俺は白猫と違って、いっぱい楽しい思いをしたんだから。だから.....

さよなら

ところが、その時、

「トラ猫君、どこにいるの!？」

ぼんやりとした意識の中で、トラ猫は金色に輝く炎を見たのです。

鳥？ でも、この鳥.....燃えてるぞ

その鳥はトラ猫のすぐそばまでやってくると、翼を大きく広げました。すると、それにかからめとられ、教室の炎が翼の方に移ってゆくではありませんか。

炎の翼を広げた金色の鳥

“ファイアーバード！”

伝説の火の鳥？ 永遠の命を持つという

「トラ猫君、しっかりしてっ！ まだ、生きる気持ちを捨てないで」
その鳥の声を聞いた時、トラ猫は、消えてゆく意識の中でふいに思い出したのです。

ファイアー・バード……でも、この声は？

「ニワトリ君……ニワトリ君なんだよな……」

トラ猫は、目の前にいるファイアー・バードを信じられない気分で見つめました。
「駄目だよ。すごく眠くって起きてなんかいられない。でも、ニワトリ君、お前、なんでそんなにゴージャスになってんの……？ それとも、俺、夢を見てるのかなあ」

こっちへ来て。一緒に私と行きましょう。

あの白猫の鈴のような美しい声が響いてきて、トラ猫は“それもいいかな”と、思いはじめました。
もう、炎の熱さも感じなくなっていました。

「トラ猫君！ 眠っては駄目。目を開けて！」

けれども、ファイアー・バードの叫びに答える事もなく、トラ猫はかたく瞳を閉じてしまいました。その様を見て、ファイアー・バードはぼろりと涙を流しました。

すると、

トラ猫たちがいた教室全体が、黄金に輝き出したのです。

炎を糧に永遠の時を生きるという伝説の鳥。その涙は、癒しを、血を口にすると不老不死の命を授けるという

-ファイアー・バード-

その鳥が、大きく翼を広げた瞬間、小学校の校舎に燃え上がった炎はからめとられるように、黄金の鳥の翼に吸い取られてゆきました。そして、トラ猫の体までが金色の輝き出したのです。

「トラ猫君の最後の命、私にはそれを見守る事しかできないのだけれど……」

それでも、勇敢でちょっとやんちゃな9番目の君は、あの白猫の哀しい心をちゃんと癒す事が

できると思うよ。

* * *

嘘のように消えてしまった校舎の火を見据え、ネズミはニワトリ小屋の前で啞然と空に目をやりました。

遠くに去ってゆく黄金の光。

「火の鳥……？」

まさか、ありえねえ！

その時です。校舎からニワトリ小屋に向かって駆けて来たトラ猫の姿に、ネズミは万遍の笑顔を浮かべました。

「トラ猫君！ 良かった。無事だったんだな！ あれ……でも、お前、なんか変だぞ」

トラ猫君って確か茶トラだったよな……なのに今は黒トラじゃないか。

不審そうなネズミを見て、トラ猫は笑っていいました。

「当たり前だろ、俺様は生まれ変わったんだ。猫は命を9つ持っている。これは、俺の最後の命、9番目の俺の姿なんだよ」

* * *

数日後、主のいなくなった小学校のニワトリ小屋の前で、トラ猫とネズミは、手持ちぶさたな様子で校舎を眺めていました。燃えたはずの校舎なのに、焼け焦げの跡すらも今はありません。

「ニワトリ君、もどってこなかったなあ……」

トラ猫の言葉にネズミはちょっと顔をしかめて言いました。

「でも、あのファイアー・バードがニワトリ君だったか、どうかもわかりゃしない」

「ニワトリ君だよ。俺は、はっきりニワトリ君の声を聞いたんだ。それに、あいつ、焼き鳥なんてとんでもないって、えらく慌ててたじゃないか。当たり前だよ、ファイアー・バードは炎の中で蘇るんだ。焼き鳥なんかにされちゃったら、正体、丸バレなものな」

そりゃそうだと、ネズミは、焼き鳥が蘇ってファイアー・バードになる様子を想像して、ぷうっと噴出してしまいました。

「そういえば、おいらにも思い当たる節があるぞ。トラ猫君の9つの命を羨ましいって、おいらが言ったら、ニワトリ君は“永遠の命なんてつまらない。なんて……おかしい事を言ったんだ。何か変だとあの時は思ったんだけど……」

「だ・か・ら、ニワトリ君はファイアー・バードだったって言ってるだろ」

それにしたって、行っちゃまう事はないじゃないか。おいら、ファイアー・バードだって、ちゃんと仲良くしてやるのに。

不満げなネズミの心を読み取ったかのように、トラ猫が言いました。

「ニワトリ君はきっと、普通のニワトリとして、ここにいたかったんだよ」

すると、ネズミは急に何かを思い出したように言いました。

「それはそうと、トラ猫君！ 今のトラ猫君は9番目の最後の命。余分の命は使い切ってもう、生まれ変わる事はできないんだろ？ でも、驚いたなあ。トラ猫君はあの白猫の生まれかわりで、白猫は学校と幸せそうなトラ猫君を恨んで火をつけただなんて」

ネズミの言葉にトラ猫は、少し顔をしかめました。

でも、あの白猫は俺にはもう命は残ってないっていった。あの炎の中で俺は確かに死んだんだ。だから、生まれ変わるはずなんてなかったのに……。

勘違いしていたのは、白猫の方だったのか？ それとも……これって、ニワトリ君……あのファイアー・バードの何かの力か？

「わかんねえっ！ もう、どうでもいいや」

いきなり、大声を出したトラ猫にネズミはびくんっと体を強張らせました。ネズミは、投げやりな態度のトラ猫を諷めるように、こう言いました。

「何にしたって、トラ猫君、お前はもう生まれ変わる事はできないんだから、命は大切にされた方がいいぞ。あの火事でトラ猫君が炎にまかれて死んだとしても、白猫は嬉しくなんなかったと、おいらは思うけどな」

すると、トラ猫は珍しく神妙な顔をして答えました。

「そうだな。俺まで悲惨な心で暮らしていたら、あの白猫だって何時までも、恨みの心を持ったままだ。“猫は9つの命を持っている”それって、俺は自分以外に8個の命を背負っているって事なんだろ？ だから、俺はせいぜい、楽しく生きる事にするよ。あの白猫のためにも」

ひげをぴんと立てて、そう言ったトラ猫に目をやると、ネズミはくすっと笑みを浮かべました。そして、くるりとトラ猫に背を向けました。

「じゃ、おいら、もう行くから」

「おい、おい。何処へ行くんだよ？ もうちょっと、話につき合えよ」

「駄目！ これから、デートなんだ。四丁目の美人ネズミと」

ちえっ、あいつ、しっかり楽しく生きてやがる。

そそくさと、駆けていってしまったネズミを見送り苦い笑いを浮かべると、トラ猫はなにげなく空に目をやりました。

今日の空は雲ひとつない青い空です。

白猫君

お前の9番目のこの命、俺は絶対大切に作るから、安心して、ゆっくり眠りなよ。

俺はせいぜい、楽しく生きる事にするよ。他の8つの命と一緒に。

すうっと空気を一つ吸い込むと、トラ猫はそれをふうっと吐き出し、それからネズミが駆けていった方向と反対の方向に、軽い足取りで駆けてゆきました。

～完～

白い魔女と黒い魔女

その白い洋館は、小学校の通学路にある空地に、一晩のうちに建ってしまったようなのです。工事がいつ始まったのか、いつ終わったのか。誰がそこに住んでいるのか……知っている者は誰もいません。

館の敷地にある桐の木は、屋根を軽く越えるほど背が高く、見事な薄紫色の花をいっぱいにかかえていましたし、玄関を出た場所に建てられた西洋風の街灯は、絵本の挿絵そのままの形で、平凡な住宅街にまったく、そぐいませんでした。

だから、自然に小学生の間では、“白い洋館”は話題の的になっていたのです。

そこに2人の主がやってきたのは、
爽やかな5月の朝と、
まだ、肌寒い5月の夜。

実は、館の窓に伸びる桐の枝に身を隠しながら、主たちも、もの珍しそうに小学生たちを眺めていたのです。

「スイートチョコをたっぷり溶かしたアーモンドチョコクッキー、果実の蜜をふんだんに生かしたアップルパイ、そして乳成分100パーセントのミルクティー。本屋で見つけたお菓子のレシピを上から順に作ってみたの。せっかく、上手く出来たんだから、あの子たちに、ご馳走したいわ」

「子供にお菓子？ 冗談じゃない。そんな高カロリーのメニューで、太らせた子供を食べる趣味は持ち合わせていないよ」

「また、そんな事を言う。子供たちは可愛いわよ。特に笑った顔は素敵よ」

馬鹿げてる。子供は黒魔術の生贄か、生き血をすすると決まってる

信じられない。そんな言葉は白魔術の魔法書には有りもしない。

「あんたとは気があわない」

「お互い様だわ」

窓辺から、ぷいっと顔を背けた白いストールの女性。

テーブルに並んだお菓子の皿に、そっと銀の蓋をすすると、彼女は少しきつい口調でこう言いました。

「学校が終わったら、私は、あの子たちと、一緒にお菓子を食べるの。もう、決めたんだから、あんたは邪魔しないでね」

にやあああ

けだるそうな声をあげて、
テーブルから飛び降りたのは、夜のような瞳をもった漆黒の猫でした。

あの街灯に灯がともるまで、あんたは好きにすればいい。
でも、覚えておきなさい。夜が来たならば、
それは、私の時間なのだから。

* *

午後3時

水晶玉が3人の子供の姿を映し出した時、白魔女の浅葱色の瞳が明るく輝きました。白魔女は、水晶玉に手をかざすと“白の呪文”を唱えました。

∞Й∞Ъ∞Ю∞ ∞Й∞Ъ∞Ю∞

それは、人と物を喜び迎える時に使う、意味のない言葉。

さあ、お菓子をお皿に盛りつけましょう。
紅茶を温めなおしましょう。

“白の呪文”の効果は絶大で、この洋館の扉の前まで来た子供たちは、呼び鈴を鳴らさずにはおられなくなってしまったのです。

3人の子供の名前は、
風太、林子、火山。

風太と林子は双子の兄妹で、小学4年生、火山は彼らの弟で小学1年生です。

噂の白い洋館の前で、誰かに手をひかれた気がして、林子が急に足を止めた時、
「何だよ？」

そう問いかけたものの、すでに風太の視線は洋館の扉に釘付けになっていました。

扉の呼び鈴を鳴らして。早く鳴らして。

頭の中に、かすかに聞こえてくる声。風太と林子は何かにつけられるかのように、白い洋館の扉に手を伸ばしました。

ところが、

「風太、林子、駄目だよ！」

弟の火山が出した大声が、二人の足を止めたのです。

口元をへの字に曲げた、火山の顔が水晶玉に映し出された時、白魔女は、えっと目をみはりました。

そんな事って……あの子には“白の呪文”が効かないの？

白魔女は、深くため息をつく、仕方なさげに2階の部屋から階下に降りてゆきました。

「駄目だったら、駄目！ その館に入っちゃあ」

「ちょっとだけ、ちょっと中を覗いてみるだけ」

しつこく袖を引っ張ってくる火山の手を、林子がふりはらった、ちょうどその時、

「あら、かわいいお客さん。中へどうぞ。ちょうど、お菓子を焼いたところなの」

なんとも言えない香ばしい香りと共に、白い洋館の扉がふわりと内側に開いたのです。

白のストールの女性。薄茶色の髪、浅黄色の瞳。外国の人？ にはしては話す言葉はよどみのない日本語で、少しもちぐはぐしたところがありません。風太は、扉の向こうの春風のような笑顔に目をやって、ぽうっと顔を赤らめました。

「駄目っていうのに！」

けれども、火山の言葉を見殺して、吸い込まれるように、風太と林子屋敷の中に入って行ってしまいました。

「何も悪さをするわけじゃない。一緒にお菓子を食べていただけ」

すると、諫めるようにつぶやく白魔女を、火山が鋭く睨めつけました。

「誘拐犯、泥棒っ！」

そんな悪態をついてくる火山に、白魔女は思わず目を丸くしてしまいました。

「その“への字”に曲げた口元を元にもどして、あなたも中に入って。そうすれば、私は誘拐犯でも、泥棒でもないことが良くわかるから」

白魔女は、鈴のような声音で笑うと、玄関でふんばっている火山の手を引き、白い洋館の扉をそっと、音をたてずに閉じました。

* *

ミルクティーのいい香りと、甘くて口の中にとろけるチョコの味、そして風通しのいい、気持ちのいい部屋。

魔法の力がなくなっても、そんな場所に招かれてしまったのです。さすがの火山でも、一時、休戦を決め込まないわけにはゆきません。

ふんわりと過ぎてゆく、白魔女と子供たちの午後のひと時。

ところが、

「ふん、何を楽しげに！ 本当に馬鹿げてる」

窓辺でその様子を眺めていた猫が、黒い吐息を吐きました。

五月蠅くて、わがままで、何を考えてるかさっぱりわからない厄介な連中。おまけに頭が悪いくせに、変に敏感。

漆黒のその猫——黒魔女には、人間の子供ほど、勘にさわるものはありませんでした。

ととと、夜がくればいい。そしたら、あいつらを根こそぎ飲み込んでやれるのに……

不満げに、白い洋館のリビングを見下ろした時、黒い猫は突然、笑いのようなかすれた声をだしました。

白い洋館の壁が少しずつ、ずれ始めている事に、黒魔女は気づいてしまったのです。とろけるように崩れてゆく、窓枠そして、柱。あまりにも微妙なその動きは、ナメクジが草の上を這うように、ゆっくりとした速度でなされてゆくのです。

「あの一番チビの子供。なかなかおもしろい事をする」

そして、漆黒の猫はそそくさと窓辺から、外に向かって飛び降りてゆきました。

* *

「駄目っ！ その紙を剥がしてはっ！」

いつ、そこに潜りこんだのでしょうか？ 護符のような紙を手に持った火山をテーブルの下に見つけると、白い魔女は大慌てでその体を、自分の方へ引き寄せました。

その魔方陣の紙を剥がしてしまえば、この洋館を形作っている魔力の効力が消えてしまう。

よくよく見てみると、火山の手には数枚の同じような魔法陣を描いた紙が握られていました。

「この家、変だよ。あっちこちの壁にこの気色の悪い絵の紙が貼られてるんだ」

「だから、全部剥がしたの？ 駄目よ！ それは、この屋敷のお守りなんだから」

貼ってしまった後に、普通の子供に見えるはずがない魔方陣の紙をよくも全部、見極めたものだ、白い魔女はため息をもらしてしまいました。

その時、時計が4時の鐘を鳴らしました。

仕方がないわ。子供たちに気づかれないように外から魔方陣を作り直しましょう。でも、術を完成するには多少、時間がかかるのよ。

けれども、楽しげな子供たちを、帰すにはまだ、少し早いような気がして白魔女は、

「私は用事を出かけるけど、4時半になったら、あなたたちは帰りなさい。鍵は開けておくし、閉める必要もないから」

すっかり満腹で林子とトランプゲームを始めていた風太は、ちょっと困った顔をしていました。

「それで、大丈夫なの？ 勝手にここで遊んでいてもまだ、いいの？」

「ええ。ただ、時間はちゃんと守ってね。私は途中で用事を抜けれないから、声をかけてあげる事ができないの」

一旦、魔法陣を組みだすと、白い魔女には外界の音も様子も何もかもが聞こえなくなります。それほど、その術には集中力が必要なのです。

多少無理をして、笑みを作ると、白い魔女は大急ぎで館から出てゆきました。

「あと、30分か。俺、さっきから、このでかくて、ふわふわのソファでごろんってなりたかったんだ！」

「私もっ。ちょっと遠慮してたけど、今、やっちゃおう！」

風太と林子は、リビングのソファに飛び込むように、転がり込みました。

「あっ、僕も僕も！」

火山も二人の中に割り込みました。3人は子猫のようにじゃれ合って、ソファの中ではねたり、飛んだり、転がったり。お互いの暖かさとソファのふわふわ感が、心地よくてたまりません。

けれども、午後6時。

白い洋館の前にある街灯に明かりが灯る頃、

“4時半になったら、帰るのよ”

風太、林子、火山の3人の子供は、白魔女のその言いつけを守る事などすっかり忘れて、疲れ果て……

洋館のソファの中で、ぐっすりと眠り込んでしまったのです。

* *

まだ、肌寒い5月の夜が足音をひそめながら、白い洋館に近づいてきました。なぜだか、今日はいつもより日暮れが早いようで、外は午後6時にしては、暗すぎるように思えました。

空には月も星も出ていません。ただ、目を凝らして見ていると、洋館にそびえたつ桐の枝の間をぬって、レースの黒いショールを大きく広げながら空を横切る、黒魔女の姿がおぼろげに浮かんでくるのです。

“さあ、夜の時間。甘ったるいおしゃべりや、我慢できない馴れ合いを、全部闇に流してしまおう。ああ、それを考えるだけで、私は嬉しくてたまらない”

黒魔女は、氷のような微笑を浮かべると、ショールをつぼめて白い洋館の窓辺に降り立ちました。

「風太、火山、起きてっ、大変っ！ もう6時よ」

ソファの上で目を覚ました林子はあせって、時計に目をやりました。白魔女との約束では4時半にはこの館を出るはずだったのです。おまけに外はいつものその時間より、ずっと暗くて何だか嫌な感じがしてきました。

「早く帰ろう。あの女の人かもどってくる前に」

たたき起こした兄弟たちをせかしながら、林子は洋館の扉を開きました。ところが……

「嫌っ、僕はここから外に出るのは、絶対に嫌っ！」

火山が、そう叫んだのです。

一瞬、驚いたように火山の方を振り返った風太と林子。でも、すぐに火山が叫んだ同じ言葉が、2人の心にもわきあがってきたのです。

外は月も星もない暗闇。明かりといえば、玄関の向こうに灯る街灯の光だけ。景色はいつもの通学路となんの変更もありません。でも……

暗い夜道を歩いている時、何かが後からついてくる。闇の中に何かがついて、自分をじっと見つめてる。

その数万倍も不安な感覚に3人はとらわれてしまったのです。

「そういえば、ここらあたりって昔、昔の戦争で何人も人が死んだんだって……。通学路の途中にある慰霊碑は、そのためなんだって」

うめき声が響いてくる。空が燃える。血が流れる……。

考えれば、考えるほど、3人は怖くてたまらなくなってしまうました。

そんな3人の様子を黒魔女は、笑いを堪えながら、窓辺から眺めていました。

“もっと、もっと、不安になれ。洋館の外の闇を踏みしめろ。その1歩がなされた時、この黒魔女がお前たちを、恐怖の世界へ攫ってゆく”

* *

「でも、いつまでもここにいるわけにもゆかないし……」

風太が、おびえながらも玄関から外を覗いた、その時です。

外にあった街灯の光が、いきなり強く瞬き始めました。そして、その光がつくる街灯の影がすうっと長く、洋館の玄関に向けて伸び始めたのでした。

“その街頭の影を通してこっちへ来て！”

風太、林子、火山の三人は、頭に響いてきたその声に目をぱちくりとさせました。

「今の声、誰？」

互いに顔を見合わせると、3人は同時に、街灯の下で、彼らをじっと見つめている白い猫に目をやりました。

まじりけのない白、澄んだ浅葱色の瞳。それが、やけにはっきりと、姿が闇にうかぶあがって

います。

“この夜の中で、黒魔女の魔法を遮れるのは、街灯の影が長く伸びて作った細い道だけ。だから、あなたたちはその上を歩いて、私の元までいらっしゃい。けれど、一歩たりとも、道はずれてはならない。さもなくば、黒魔女の世界に引きこまれてしまうから”

どきどきと3人の心臓は高鳴りました。やはり、この声の主は街灯の下の白い猫のもののようにです。

“夜の時間では、私の呪文の効力は長くは続かない。だから、急いで！ その道を渡って！”

とまどっている場合ではありません。闇はどんどん3人に迫ってくるのです。

「風太、先にいってよ」

「ええっ」

「だって、お兄さんでしょ」

“林子と僕は同じ年じゃないか”と唇をとがらせながらも、風太は、勇気をふりしぼって、街灯の影を踏みしめました。そして、林子、火山がそのあとに続きます。

胸を押しつけるような重苦しい風が子供たちの頬をかすめてゆきます。

夜ってこんなに怖いもの？

安全な道は、子供一人がやっと通れるだけの幅しかない街灯の影の上だけ。

やっとの思いで、街灯の下にいる白い猫の元へたどり着いた時、風太と林子は心の底から安堵の息を吐いたのです。

“良かった。あとはあのおチビさんだけね”

ところが、

「火山っ！！」

一番、後ろにいた火山が何かの拍子につまづいて、転んでしまったのです。街灯の影を大きく外れて、火山は闇の中に放り出されてしまいました。

“やった、やった！ 白魔女に邪魔はされたけど、この子一人でも、連れてゆければ、それで上等！”

黒魔女は喜びいさんで、腰のショールを大きく広げました。すると、闇はあっそう濃く深まり、唯一、明るく照っていた街灯の灯さえも、翳りだしたのです。

その時です。

痛そうに膝を押さえた火山が急に、顔をあげ、きつとした目で空を睨めつけました。

すると……

緑色の月が夜空にこうこうと、輝き出したのです。

火山を今にも、闇にとりこもうしていた黒魔女は、うっと一つ唸り声をあげると、かき消すように姿を消してしまいました。

“早く、こっちへ来て！”

白い猫は、たまらず火山の方へかけよって行きましたが、月の光に形作られた火山の影を見て、一瞬、身をこわばらせました。

頭には二本の角、背には大きく広げられた蝙蝠の翼。

“……魔王、ルシファー?! 大天使ミカエルの双子の兄……そんな、あなたは どうして、こんな所にお隠れになっているのです?”

平凡な夜がもどってきました。風太、林子、火山は家々の明かりが灯る住宅街の道をしっかりと手を繋いで家路を歩いてゆきました。

「不思議。さっき、あんなに怖かった夜の景色がちっとも怖くない」

きつと、ソファで眠っていた時に夢を見たんだ。

風太と林子は、同時にそう思い、心の中で頷きました。

「おい、やめろよ。歩けないじゃないか！」

急いで2人の後をついてゆこうとする火山の足元で、白い猫がからみつくように、ぐるぐると廻っています。

“深遠なる魔王よ。まだ、この子の力は大きくはない。だから、その力を封印する事をお許し下さい。でも、この子供の中にお隠れになったあなたは、この子が大きくなった時、この街で何をしようというのですか?”

やがて、この街に魔王が降臨する日が来るというのか……けれども、そんな悪い予感は少しもしない。大天使ミカエル……あなたはどこにおいでです? この子のそばに強く感じるあなたの余韻が、私の不安をとりさってゆくのです。

* *

次の朝、白い洋館は、かきけすように、その姿を消していました。工事がいつ始まったのか、いつ終わったのか。……知っている者は誰もいません。

ただ、3人の子供たちだけが、その住人を知っていたのです。

白い魔女と黒い魔女。そして――白と黒の不思議な猫を。

～完～

初冬の誓い～寺町連続放火事件

花村大社の鳥居のそばには、小さな茶屋がある。

1月も6日、まだ、初詣の人々が途絶えない初冬の日。いかつい顔をした刑事が一人、茶屋の近くで足を止めた。

川上裕太（かわかみゆうた）32歳。花村署刑事課捜査第1係。

“また、今日も放火事件の聞きこみかよ。こう、しょっちゅう、通報があると、睡眠も満足にとれやしない”

すると、茶屋のまわりに山と積みあがった落ち葉と格闘する一人の老女の姿が目に飛び込んできた。集めた落ち葉が風に吹かれる度に、箒をバタバタと振りまわすものだから、余計に落ち葉があたりに広がる。

“お～お、ずいぶん面白い事になってるぞ。この茶屋の主人だろうか？”と、くすりと笑い、眠そうな気分が少し薄れた時、川上ははっと大きく瞳を開いた。

「おばあちゃん、そろそろ、店、閉めましょうか？」

「もう、ちょっとね。まだ、6日だから、初詣の客も残っとるし……」

この婆さんの孫娘だろうか？ 10代後半といったところか、艶やかな長い黒髪と漆黒の瞳、それと対称的な白い肌。

こんな田舎町にもったいないくらい綺麗な娘だな。

理不尽な感動を胸に押しこんで、川上は茶屋の方へ歩いていった。

「ここの店の人？」

と、胸ポケットから、警察手帳を取り出すと、孫娘とおぼしき美人の方へそれを見せる。

「あ、はい……警察の人？ 何かあったんですか？」

黒い瞳がきらきらと輝いている。川上は思わずぐっと息を飲みこんだ。

「少し、覗きたい事があって……最近、この近くでボヤ騒ぎがあったでしょ」

そこに老女が、興味深々の体で話に割って入ってきた。

この老女の名前は、道明（どうみょう）サエ、そして、美人の方は孫娘の道明千秋（どうみょうちあき）。

「寺町で続いて起こってる火事じゃろ？ 檀家さんたちが放火じゃって騒いどった」

「警察でも色々調べてましてね。何か参考になりそうな事があったら、何でもいいから教えていただけると、有り難いんですが」

川上の言葉に千秋は不安げに言った。

「やっぱり、放火なんですか？」

「いや、まだ、放火と決まったわけでは……ただ、週末に集中してるんで、可能性は高いって事

です」

「わかりました。何かありましたら、お知らせします……刑事さんも大変ですね」

「お、お願いします」

と、不器用そうに一礼すると、川上は、初詣客の後を追うように鳥居の外に歩いていった。

「あの刑事、お前に気があるみたいじゃ」

サエは、にやりと人の悪い笑みを浮かべると、千秋のセーターの袖をつんと引っ張った。

「もうっ、何言ってるの！ 今、会ったばかりの人でしょ」

怒ったように顔を赤くした千秋は、そそくさと店の中へ入って行ってしまった。

* *

“週末に寺町に起こる放火事件……犯人はこの周辺に住んでいるに決まっている。それなのに、目撃者は誰もいない”

夕暮れの参道を歩きながら川上はため息をもらした。そして、疲れた気分で、通りすがりの小さな祠に目をやった。

「そういえば、初詣もしてなかったな。忙しさにかまけて、正月どころの話じゃなかった」

ここで、犯人の早期逮捕でも願ってゆくか……

刑事捜査の最中に神頼みというのも、情けないような気がするがと、川上は大きな肩を小さくつぼめて、こっそり両手を祠に合わせた。

その時だった。

「今年こそ、かわいい彼女ができますように。凶星をついているでしょう？ 刑事さん」

背中越しに聞いてきたその声に、川上は、はっと後ろを振り向いた。

男が一人立っていた。らくだ色の作業着に肩から担いだ、測量用の計器とトランシット。歳は20代後半といったところか、つりあがった切れ長の目。茶色に染めた長髪。見るからに軟派そうな男の顔つきに、川上は軽く眉をしかめた。

“測量士？ 今から仕事か……それも一人で？”

「いや、もう仕事は終わりですよ。ちょっと、そこの茶屋に知合いがいるんで休んで行こうと思っ
てね」

男は川上の心を読みとったかのように、そう言って笑う。

「何で俺が刑事なのを知ってるんだ？」

「え？ だって、あんた、あちこちで警察手帳を見せびらかしていたじゃないですか」

妙に挑戦的な態度の測量士に、川上の疑惑は深まってゆく。

「なら、放火事件の事も知っているんだな。何か、こころあたりでもあるのか」

「全～然、僕はほとんど毎日、ここで測量をやってるけど、怪しい人は見た事も聞いた事もない
ですね」

「おたくは、建設会社か何かの人？ 良かったら名刺か何か連絡先のわかるものをもらえない
かな。毎日、ここに来てるなら、色々と聞かせてもらいたい事もあるし」

「あ〜、いいっすよ。はい、これ」

男は、1枚の名刺を川上に手渡すと、カチャカチャと測量用具を鳴らしながら、鳥居の茶屋に向かって歩いていった。

〇〇建設 土木部 測量士 三狐神仁（みけつかみ ひとし）

“三狐神（みけつかみ）……なんだか名前まで怪しい奴。茶屋に知合いがいるって？ この辺りにあるのは、さっきの鳥居の傍の茶屋だけだよな”

川上の脳裏に茶屋の娘の姿が浮かぶ。艶やかな長い黒髪と白い肌。ここら辺りじゃ見かけた事もないような美人。あの怪しい野郎とどう考えても繋がらない……

早急に調べをいれる必要有り。今日も、やはり、眠れない夜になりそうか……。

* *

5月、寺町の民家の屋根からまた出火。軒先に飾ってあった鯉のぼりが夕暮れの空に赤くたなびき、飛立つカラスの群れの黒と相まって、寺町の空は異様な空気に包まれていた。

屋根の一部と鯉のぼりをこがしただけで、大火にはなる事は避けられたが、民家の近くの路上に集まった住民たちは、不安げに火災の跡を見つめていた。野次馬たちにまぎれながら、道明サエは孫の千秋に言う。

「今回もボヤで済んで良かったけど、気持ち悪いねえ……警察はいったい、何やってんだか」

不満げなサエに、千秋は少し怒った顔をする。

「そんな事言ったら、川上刑事が可哀相よ。あんなに一生懸命、調べてるのに」

「千秋、お前、ボヤが起きた方が嬉しいんじゃないかい？ 川上さんと会えて」

「お、おばあちゃん、それどういう意味?! まるで私が放火犯みたいな言い方しないで頂戴!

」

「おお、怖い……冗談だよ。冗談」

サエは千秋の剣幕に、少し首をすくめて笑った。

* *

花村署刑事課捜査第1係。

刑事、川上裕太は事務所に入るや否や、手にした新聞をばさりと自分の机の上に投げ出した。

朝刊の3面。日付は5月4日。

『花村大社近くで、また、連続不審火』

「ゴミ集積所、ベランダのカーテン……目撃者はなし。2、3月の被害は1件もなかったというのに、ここにきてまた、週末に放火と見られる火災が連続で発生……」

隣の机に座っていた同僚が、うんざりといった表情で、川上を見上げる。

「これで、年末から6件目だな」

「しかし、放火としたら間隔が空きすぎてる。放火を楽しむ輩は、集中して犯行を繰り返すものだから……」

「麻薬みたいに火を見る快感を早く、見たくなるってか？　だが、週末に起こるっていうのは、放火犯の定石通りだろ」

川上は少し、考えこんでから、くるりと机に背を向ける。

「ちょっと、行ってくる！　何かあったら携帯に頼む」

そそくさと事務所を出て行ってしまった、川上。

「何だ、あいつ。いやに落ちつかないな」

「花村大社の茶屋の娘が、えらい美人らしいぞ。あいつ、頻繁に通ってるそうじゃないか。職権乱用……ってやつじゃねえの」

2人の話を聞いていた別の同僚は、そう言って、人の悪い笑みを浮べた。

*　　*

6月、花村大社の茶屋。

「おばあちゃん、おばあちゃんったら！　もう！　夢中になると何も聞えなくなるんだから」

小さく頬をふくらませ、奥の部屋に呼びかける千秋に、茶屋に立ち寄っていた川上が笑う。

「サエさん、少し、耳が遠くなってる？」

だが、千秋は“とんでもない”という風に言った。

「パソコンよ。チャットっていうの？　あれに集中しだすと、私なんてそっちのけ」

「パソコン？　サエさんっていくつだっけ」

「72……でも、ネット上では22歳のお嬢様！」

笑顔を作ってみたものの、川上は心の中で呆れかえってしまった。

本当にとんでもないバアさんだな。可哀相に……一体、何人の男（多分）がこのバアさんに騙されてんだ？

その時、茶屋の裏口から声がした。

「サエさん、いる？」

なにげなく振向いた瞬間、川上はひどく不快な顔をした。

三狐神仁（みけつかみ　ひとし）

以前、寺の祠であった怪しい測量士。

「お前、ここの茶屋に何の用だ？　客ならちゃんと入口から入れよ」

ぶっきらぼうな川上の声音に、三狐神はひきつった笑いを浮べる。

「なあんで、怒ってんだよ。俺は友達に会いに来ただけなんだぜ」

「友達？」

そんな二人の険悪な雰囲気には耐えきれず、千秋が割って入ってきた。

「三狐神さんは、おばあちゃんのチャット友達なの。時々、こうやって直接会いに来て、お話ししてゆくよね。つい最近も、このあたりで起きた火事の事を心配して、色々と情報をくれたのよ」

「そうそう、一連の火事って、この茶屋の周りで起きてるんだ。でも、その情報をチャット仲間から集めて、最初の分布図を作り上げたのは、サエさんなんだぜ」

得意顔で言う三狐神に、川上は渋い顔をする。

そんな情報なんぞ、警察ではとっくに手に入れている……。それにしても、チャット仲間？ 72歳の老婆とか？ こいつ、ますます怪しいぞ。

あの歳でパソコンを使いこなすサエさんもサエさんだが……

川上は、何だか頭が痛くなってきた。

すると、その時、

「あらっ、また、消防車のサイレンだわ?!」

茶屋の向こうから聞えてくる、けたたましいサイレン音。

とっさに、川上が見上げた三狐神の顔。意味深な笑顔を浮べて、彼は茶屋の裏口に立っていた。

その笑顔の理由は一体何だ?!

そして、連続するボヤ事件の犯人は……。

* *

8月、花村大社の夏祭り。参道の両側に並んだ夜店の風鈴が涼しげな音を奏でている。その参道を千秋と川上が歩いていった。

風に揺れる千秋の黒髪に思わず見入ってしまいそうなり、川上は大慌てで気分を通常モードに切替えた。

「3日前にまた、不審火か……」

「放火なのかしら……本当に？」

「何人かの容疑者を引っ張ってきたんだが、放火の証拠がないんだよ」

千秋は苦い顔の川上から目をそらすと、ふっと夜店の風鈴に目を移し、チリチリと鳴るその音に耳をすました。

「可愛い音ね」

微笑む千秋の方がよほど、可愛いな。

少しくらい、職権乱用でもいいじゃないか。

千秋の視線の先にある赤い風鈴

「これ、欲しいの？」

と、川上は笑顔を作ろうとした……が、

「おばあちゃんっ」

驚いたような千秋の声に振り向いたその先に、川上は、そそくさとお社の階段を上がって行くサエと測量士の三狐神の姿を見た。

「待って、おばあちゃん、どこへ行くの」

慌ててサエの跡を追う千秋、その跡を追う川上。そして、お社の階段を登りきった時、2人は目の前に広がった薪能のような幽玄の世界に目を見張った。

サエがもつ蝋燭の灯が、社の階段の灯籠の1つ1つを照らしだしている。

「あっ……」

一声そう言ったきり、千秋は呆然とその場に立ち尽くしてしまった。どうみても様子がおかしい。たまりかねて川上が声をかけようとした、その時、

「おや？ 二人して息せききって、どうしたんじゃ？」

きょとんとした目でサエが言った。

「どうしたって？ サエさんこそ、こんな所で何してるんです？」

「何って、うちは花村大社の檀家だから、こうやって灯籠に灯を灯すのを手伝ってるんじゃないか。特に夏祭りの時は人手が足りないから、今日なんて三狐神さんまで、駆出す始末じゃ」

サエの隣にいる三狐神をじろりと睨めつけてから、改めて階段に目をやる川上。なるほど、確かに花村大社には相当数の灯籠が点在している。

「ところで、千秋さんは何故あんなに急いで、行ってしまわれたんですか？」

不思議そうに三狐神は首をかしげた。川上がサエと話をしていた間に、千秋がいなくなってしまったのだ。サエとの話に夢中になっていた川上は少しうろたえたように言った。

「千秋さんはどこだ？」

「さっき、お堂の方へ駆けてゆかれましたよ。何やら急いだ様子で」

「馬鹿っ、何でそれを早く言わないんだっ」

三狐神に乱暴にそう言うと、川上は脱兎のごとく階段を駆け降りていった。

“鳥居の近くにある、お堂の中に赤い火が見えたのよ”

息せき切って駆けてきた千秋がお堂の扉を開いたとたん、数十羽のカラスが一斉に墨が飛び散るように床から舞いあがった。

「やっぱり」

床と壁際から小さな火が出ている。千秋はその火を消そうとお堂の中に踏み込んだ。……が、その瞬間、

ぼうっという轟音と共にお堂の中の火が、高く火柱をあげたのだ。

「うわっ、ヤバっ、こっちまで火がきやがった」

手に灯油の赤いポリ容器を手にした男がお堂のそばから逃げてゆく。

だが、

「ちょっと、待て！ 放火の現行犯で逮捕する」

とてつもない激しい力で二の腕を捕まれて、その男は身動きができなくなった。見上げた視線の先には、いかにも刑事風のいかつい顔をした川上がいた。

「ち、違う。俺は火なんかつけてない」

「見え透いた嘘をつくなっ、その手のポリ容器は何だっ」

「ひ、火が先に出てたんだ。俺は放火なんかしていないっ」

「でも、その火に灯油を注ぎこんだのはお前だろっ」

燃える炎が真近まで迫ってくる。逃げようにも燃え立つ炎が大き過ぎ、出口が見つからない。

「どうしよう、どうしたらいいの？」

千秋は熱さと、立ち込める煙に蒸せかえりながら、おろおろと辺りを見渡した。その時、視界の中に、神棚に祭ってあった白い狐の置物が入ってきた。

「……おばあちゃんがいつもお供えをしてるお稲荷さん」

千秋は、無意識にその狐の置物に手を伸ばした。すると、千秋の目の前が急に白く輝いたのだ。

「早く、こっちに来てっ」

その時、突然、自分の手をとった男の姿に千秋は啞然と見入ってしまった。

* *

目の前に燃え上がる赤い炎。羽交い絞めにした放火犯人を逃がすわけにもゆかず、千秋を助けたくても、あまりの火の激しさに中に飛び込む事もできない。

畜生っ

川上はなす術もなく、唇を噛み締めた。その時、

らくだ色の作業服の男が燃え盛るお堂の中に飛び込んでいったのだ。

「三狐神っ」

それから、数分後

「千秋さんっ！」

それは、一瞬のうちに垣間見た夢のようだった。白い光に包まれた千秋が1人で炎の中から姿を現したのだ。駆けつけてきた他の警官に放火犯を渡すと川上は血相かえて千秋の元へ駆け寄っていった。

「千秋さん、大丈夫か？」

「大丈夫……あれが助けてくれたから……白い狐……」

「狐？」

千秋は、その言葉の続きは声にはできなかつた。あまりにも非現実すぎたから。

“神棚のお稲荷さんが、自分を守ってくれただなんて”

消防車のサイレンの音がけたたましく響き渡り、火事を聞きつけた野次馬たちが集まってきた。吹きあがるような炎が暗い夜空を真紅に染めてゆく。

千秋は、燃えつづけるお堂に顔を向けるとはっと目を見開いた。

「川上さん、私、わかったの！ わかったのよ。放火犯人が誰か！」

「えっ?!」

そして、燃えるお堂の一角を千秋は指差した。

空に一羽のカラスが飛立ってゆく。その口ばしに小さな“炎”をくわえながら！

「私、前に聞いた事があるの。カラスは蠟燭の蠟を食べるって。だから、おばあちゃんを追いかけてお社の階段をあがった時に、火のついた灯籠の蠟燭をついばんでいるカラスを見た時には、本当にびっくりした。そして、同時に目に飛び込んできたお堂の火……」

「だから、その事を確かめようとして、千秋さんはお堂に向かって駆け出したのか。でも、まさか……そんな事って」

「だって、思い当たる節は沢山あるわ！ ボヤが起きるのは、花村大社の灯籠に灯が灯される週末に限られている。それに、おばあちゃんのチャットの相手の話にも、火事現場でカラスを沢山見たって書きこみがあったのよ」

* *

数日後

花村大社の参道を歩く川上と千秋。

「結局、動物学者に調べてもらった結果、不審火の原因はやはりカラスの線が濃厚になってる。奴らが運んでいった蠟燭の火が他へ引火する証拠のビデオも撮影されたしね。カラスは利口でね、火を怖れる事もないし、火がついて柔らかくなった蠟はカラスにとって、かっこうの餌になっていたようだ。それに加えて、放火事件の事を知った便乗犯みたいな奴らも現れて、事件がややこしくなっちゃったってわけだ」

「そんな事もあるのね……でも、これで川上さんも、やっと放火事件から開放されて……もう、ここへ通う必要もなくなるのね」

うつむく千秋に川上は、躊躇していた言葉を言ってしまった。

「来るよ！ 仕事とはまた別に。毎日だって、俺は来る。千秋さんが迷惑じゃないんなら」

ぽっと頬を赤めた千秋の目に、参道にあった小さな祠に奉られている白い狐の置物が、飛びこんできた。どこかで見た事なる細い瞳の白狐。

お稲荷さん……？ おばあちゃんがいつもお供えをもってゆく

その白い狐の置物はこう言いたげに、少し口元を開いている。

なかなか、いい趣向だったでしょ

“だってね、放火犯人が早くつかまりますようになんて、今年のお正月の川上刑事の願いがあんまり真面目すぎたんで、ちょっと、おまけをつけてあげたんですよ”

-かわいい彼女ができますようになってね-

寺町の連続放火事件は、こんな風に幕を閉じた。

何件かはカラスの仕業と解釈できない事件もあったが、それは、また川上刑事に捜査を続けてもらう事にして、

とりあえずは、一件落着。

～完～

短編集 ～小さな夜話～

<http://p.booklog.jp/book/34589>

著者：風梨凜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kazanasi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34589>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34589>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.